

生涯学習

No.521

かおり高い 文化のまち

発行 下諏訪町教育委員会
編集 生涯学習
編集委員会

〒393-8501
長野県諏訪郡下諏訪町4611-40
(下諏訪総合文化センター内)
☎ 0266-27-1111(内線718)
FAX 0266-28-0131
E-mail=syougai@town.
shimosuwa.lg.jp

生涯学習 2017.10 8

子どもたちと楽しむ下諏訪の秋

友之町 寺島 美奈子



現在高校生になった長女が小さい頃から今でも、あちこちの公園に度々出かけています。水月園、みずべ公園、あすなろ公園、あるいは諏訪湖端の散歩等々。



秋の水月園では、色とりどりの葉っぱを枝に次々刺し、おだんご?やきとり?と楽しむ子どもたち。何気なく作る子どもたちの作品は、赤や黄色の葉っぱが連なると、とてもきれいでした。みずべ公園では、たくさんのおんぐりを夢中になり拾い続ける子どもたち。

いずみ湖公園では、だっこの会の仲間との運動会や土手滑り園内を散歩すると、ひよこりきのが生えていたり、栗の実が落ちていたりします。今はもう中学生になった息子が小さかった頃、たくさん拾ってきてくれた栗で、栗ご飯を炊いたこともありました。

のように、学校や、保育園の遠足で、赤砂のりんごの木からおすそ分けをいただきます。子どもたちのリクエストで、ジャムに焼きりんごにしたり、子どもたちが喜ぶものを作り、美滋滋と頬張る姿を見るのがうれしくて幸せを感じます。



小学校のマラソン大会では、寒くなり始めたひんやりとした空気の中で、諏訪湖端をハアハアと息を切らし、苦しくても必死でゴールを目指す子どもたちの真摯な姿に感動します。



恒例のイベントです。昨年、子どもたちの周りにはゲームやスマートフォンなどの機器が溢れていますが、自然の中に連れれば、ゲームやスマホなどなんにもなくとも、楽しんで遊べるのが子どもたちですね。

一年を通して、豊かな自然の中でいつでも遊べる環境があり、また、子どもたちを連れて楽しめるイベントがたくさんあるのが下諏訪町の良いところだと思います。

これから秋が来て、また例年通り、子どもたちと下諏訪町の秋を楽しむのが楽しみです。

■諏訪湖博物館の10月の休館日は、2・10・16・23・30日です。

自然に親しみ、自然を楽しむ

溪流に足を運んで六十五年

高木 久保田 伸三



私が溪流釣りに凝り始めたのは高校生の頃だった。川の周囲の環境や水流の美しさにひかれ、また先祖はサケのように海と川を往復していたというアマゴやイワナの経歴に不思議な魅力を感じたからでもあった。

進学した東京水産大学増殖学科の中に私とよく似たのが一人いた。蒲崎市出身のN君だった。彼は溪流釣りの名手であり、きこの狩りの名人でもあった。学内の同じ寮生だったこともあり、たちまち意気投合し、四年間の付き合いが始まった。卒業論文は共同でやるうということになり、勝手知った砥川をベースに、アマゴとヤマトイワナの生態研究に取り組んだ。

その結果、いくつかの興味深いことが分かった。例えばその流れ分布には真夏の水温が深く関わっていて、アマゴは本流の18℃付近(浮島のあたり)から上流にかけて各支流の12℃くらいまで、イワナは13℃くらいか



ら上流に分布することが分かった。ちなみにイワナの分布上限には、源流の急勾配や流量減少が関わっていた。卒業後N君とは別れ別れになってしまったが、四年前帰らぬ人となった。

勤めていた水産会社を辞し郷里に帰った私は、昭和六十年頃から再び溪流に足を運ぶようになった。以前よりは釣り人口も増え、砂防堰堤の増加など魚への負荷が増しているのを感じた。そこで私は、釣れた魚から様々なデータを収集して、資源保護に役立てたいと考えた。一尾ごとに捕獲地点や日時の記帳、体長や体重測定、生殖腺の目方や抱卵数を記録し、年齢推定は鱗の生長線を読むことにした。



平成十年、ある講習会に出席した私は講師の一人Kさんと知り合った。Kさんは県の自然保護研究所(現環境保全研究所)の研究員で、魚類や両生類が専門だった。保有する諸データをお送りしたところ、大変貴重だと評価していただき、データの相互関係を解析の上、論文にまとめ二人の共著として同研究所紀要に掲載していただいた。

その後もKさんとは交流が続き、平成十四年には砥川水系のヤマトイワナ(県レッドデータブック準絶滅危惧種)について共同調査を行った。その論文が今年七月に研究所の研究報告にのり、資源保護に役立つ資料となった。

私も今年満八十五歳、今でも時々溪流に足を運んでいる。いつまで続けられるかわからないが、山や川や魚への感謝の気持ちだけは忘れないようにしたいと思う。

平成十年、ある講習会に出席した私は講師の一人Kさんと知り合った。Kさんは県の自然保護研究所(現環境保全研究所)の研究員で、魚類や両生類が専門だった。保有する諸データをお送りしたところ、大変貴重だと評価していただき、データの相互関係を解析の上、論文にまとめ二人の共著として同研究所紀要に掲載していただいた。

9 生涯学習 2017.10

■下諏訪総合文化センターの10月の休館日は、3・10・17・24・31日です。

下諏訪に歴史を訪ねて ～伏見屋邸～

江戸の昔から歴史を刻む伏見屋邸。現在は江戸の情緒を残しつつ、様々なイベントや展示の場として、今に生きる人々の目と耳と心を和ませてくれています。



石仏百顔

矢崎一路写真展



伏見屋邸 東町下旧中山道沿

矢崎一路さん：昭和10年生まれ。現在岡谷市在住。石仏写真を中心に、東京銀座、諏訪プラザ、岡谷真福寺他各地で写真展を開催。伏見屋邸での写真展は、今回で7回を数える。



諏訪の民話 千葉玲子さん



スウィング歌謡 チャーリー坂本さん

音楽とトークの一日…七月二十三日

雑記帳から・・・

- おいしいお菓子とおつけものがありがとうございました。前を通っただけに、声をかけていただき、優しさがうれしかったです。
- 北海道函館から訪れました。すばらしい歴史のある町ですね。また訪れます。
- 山梨県の身延町から学生時代の友と来ました。私も昔の古い家で育ったので、とても懐かしい思いをしました。天気も良く、食事も美味で、良い旅になりました。
- 興味深いお話を聞かせていただき、ありがとうございます。温かいおもてなしがとても嬉しかったです。機会があればまた伺わせていただきます。
- 北海道の小樽から長野県は初めてです。江戸時代からの素晴らしい造りの建物を見学させていただき、おもしろいものとお茶をいただきました。ありがとうございます。

下諏訪に歴史を訪ねて ～今井邦子文学館～



三区婦人会茶道部と真木の会の皆さんによる献茶



今井邦子文学館 湯田町



湯田町の今井邦子文学館では、七月十六日（日）の邦子忌に合わせ、抹茶献茶や初めての試みとなる公開短歌会、十余回を重ねる邦子童話の朗読が行われ、幅広く活躍した邦子を偲ぶ一日となりました。今回、短歌会、童話朗読の経緯について、それぞれ代表の方に寄稿をいただくとともに、当日の様子についても記述していただきました。

公開短歌会 あさかげ短歌会下諏訪支社

あらかじめ会員の中から心象詠、時事詠、自然詠など分野の異なる歌を選び、まず司会者（高木萬知江さん）が資料と共に歌の解説をし、そのあと作者弁も含め参加者から意見・感想を聞くという、通常の歌会と手法を変えて行われました。



邦子忌短歌会詠草

灯りなき部屋ぬちに入る平家ポタル還り来るか光のやはしゆかしきは琴に託して思ひ告げ言葉少なに別れしことよ水無月の雅栗流るる齊田に田植え姿の早乙女揃ふ
若者に改憲の声を愁ふテロの脅威と戦争の地鳴り宿の湯に娘は亡き胸を見てといふ見たくないよと囁くわたし薫風に山の若葉は揺らめきて余花おちこちと朧に見ゆる思ひ出を語り出づる葬りの夜果樹園揺らし雨降り続く今の事又聞いたよと娘に言はれ老いに気付かぬ此の身愛しむ白蓮歌碑優しき書体見つめつつ思ひめぐらす大正ロマン堅香子と称ぶにふさはし春風に揺られてひっそり咲きしこの花ひそけさに刻止まりしと思ふ夕人恋ふ夜に小手毬匂ふうつし世の傍さしみじみ白々と茗荷の花のあえかに咲けり忙しかるひと日和くなり夫と夜を言葉はいらぬこぼろぎの声

邦子の童話集「笛を吹く天人」

全十四編「朗読」の周辺

語りと朗読の会

邦子は、赤彦に師事していた三十二歳の時に童話集「笛を吹く天人」を出版しました。平成十七年、当時の赤彦記念館館長の宮坂さんから、赤彦記念文学祭の朗読の会に、邦子忌で語って、大勢の人に知って欲しいと童話を読むように依頼されました。地元では知る人の少ない物語ですが、人と動物、怪異との交流が文語文で描かれ神秘的な世界に溢れています。全編に共通する内容からは、人への愛おしさ、心に祈りの声が響いてくるような、邦子の神仏に寄せる想いの深さが伝わってきます。

《今回朗読した「ひかりもの」の粗筋》
両親は親不孝な息子に賢い娘を嫁に選んだが、その娘は冬の朝釣瓶の水を浴びると赤青等の怪光を発しては、井戸を上下する怪物を受けた。息子を悪魔の魂にせよとの王の命令を受けた、娘に化けていたが、親の信じる神の力には勝てない、許してくれと怪光嫁は散った。息子は自分の怠けを悟り、深く親に孝養を尽くしたという事です。



としょかんまつり2017

きてね 10/21(土) 22(日) きてね

家族みんなで楽しめる企画満載！ぜひこの機会に図書館にいらしてください。
期間中、いつもは入れない閉架書庫の見学も行います。予約制ですのでお電話で予約をしてください。

21(土)		22(日)	
9:30~ 展示 ・下諏訪俳句会 ・エンジョイフォトSUWA写真展 ・諏訪木鶏クラブ	10:00~12:00 体験しよう朗読点字 10:00~12:00 子ども俳句教室 10:30~12:00 おはなしの広場 北小生徒による劇 社中生による 大型絵本読み聞かせ 星の会の朗読 おはなしのへやに よる人形劇 「ふるやのもり」	9:30~ 展示 ・下諏訪俳句会 ・エンジョイフォトSUWA写真展 ・諏訪木鶏クラブ	10:30~12:00 晴Ka-Ze(カゼ) キーボードとカホンによる演奏。 中学生と高校生のデュオです。 10:00~12:00 体験しよう朗読点字 マジックショー 下諏訪マジック愛好会 14:00~15:20 ブックカフェ しもすわブックプロジェクト 子どもたちのおもてなし カフェです。 ・抹茶・コーヒーのサービスがあります。(無料)
15:00~16:00 雅楽と朗読のおくりもの ・下諏訪中学校雅楽会 演奏 ・やまびこの会 朗読 ・諏訪木鶏クラブ 朗読			

問い合わせ先 下諏訪町立図書館 0266-27-5555

して表座敷の縁がわに座らせ、言われるままに首筋を揉んでやった。それで大部楽になった様子なので、私は父の用事で外出した。行った先が不在のため用がたりず学校に立ち寄っていた。すると近所の林さんが、「やい、おやじいけねえはや、早く来いや」と知らせてくれた。あわてて帰ってみると、村の人たちもかけつけて来ていた。父は昏睡状態で、母と一緒に父の名を呼んだが、父は再び目を開こうとはしなかった。父はそのまま午後になって息をひきとった。父はかぞえて六十三才であった。

母は合掌させた父の手を両手でおさえ、悲しみをじつとこらえようとして、全身がわなわなふるえていた。先月長兄の戦死の報を受け、一ヶ月してまた頼りとする父を失ってしまった。母の嘆きははかりしれないものがあった。通夜の翌朝、目を真っ赤にはらせて、「おとっ様、一晩中そばに寝てやったが、あつたかくならなかつたわ。」と言いつつ、人が変わったように立ち働いていた。

十九年は太平洋戦争も物量を誇る連合軍に押され、日本軍は各地で苦戦をしいられていた。徴兵検査が一寸繰り下げられて私も八月二日に、一年上の人たちと検査を受けた。軍人として最も適した体格、それに健康体の人がもたらえる「甲種合格」というのに私も合格していた。十月十四日の夕刻、役場の兵事係の方が訪れて、「薫き、いよいよ来たぜ。十一月二十五日、松本五十部隊へ入隊」と力強い声で読み上げ合状を置いていった。当時招集合状は赤い紙に印刷してあったので「赤紙」と呼んでいた。しかし、私の受け取ったのは現役兵のためか「白紙」へ印刷してあった。

「お前んとこへもいよいよ来たかえ、そりやあうかうかしていれねえは……。」母はそういつたが、兄、父の死、それにわたしの入隊と、二重、三重の打撃であったにちがいない。しかもわたしの入隊の日がちょうど兄の遺骨の帰ってくる日だった。皮肉というか、運命のいたずらというか、何故にこうまで追い討ちをかけるのかと思う程だった。私も兄の遺骨受領に母と弘前まで行く計画であったが、変更せざるを

得ず、伯父と将校の義兄が母に付き添って行くことになった。私の入隊の数日前、母たちを上諏訪駅まで送った。母は窓も開けずじつと額をガラスにおしあてて、涙をこらえているようだった。「体に気をつけてな、兄ちゃんの仇を討ってこいよ。」と言っているようだった。私も首でうなずきながら、もう二度と逢えなくなるかも知れない母を見据えながら、遠のいていく列車を見送った。

十一月二十五日、私は母を三人の姉や村の人たちによくよくお願いし、全校児童や村の人に送られ悲痛な思いで松本五十部隊に入隊した。私たちは北支派遣ということで別扱いのようで、そう緊張感もなかった。私は早速兄の遺骨の見送りができないのか申し出てみたが、「誠に気の毒だが外出不可」という答えであった。入隊二日目に私は呼び出され、面会所へ行った。姉と義兄の顔が見えた。何か救われたようなホッとした感じがあった。二人にぎこちない敬礼をすると義兄も笑って答礼した。兄の戦死の情報が記された手紙がわたされ、目を通していく中に涙があふれ出そうになってきた。「肋骨骨折、肺損傷」という文字が焼き付き、あとは涙でかすれてしまった。涙を見せまいとあわてて面会所を辞して出てしまった。父の口寄せが思い出された。母も疲れを休めて近く面会に来るといつていたが、私たちは母の面会を待たずに十二月二日北支へと出発してしまっただけだ。

(イラスト・黒澤 玲子)



家の窓のまわりで

「ほのぼの」という題で原稿依頼をいただいたとき、ほんのりと心が暖かさを感じるような、ほのぼのとした気持ちになったことが最近ばかりなくて困ったなあと思いました。

素晴らしい景色を眺めているときや、水辺などの清々しい場所に佇んでいるときに、思わず深呼吸をしてしまうほど癒されることはあり、心が和むときと言えば、乳幼児の仕草や無邪気な笑顔、お年寄り夫婦がにこやかに寄り添っている姿を見たとき、などと考えていたらありました。

私の両親は二人とも八十八歳です。そこへ先日、私の弟夫婦がその二人の息子夫婦と孫二人を連れて遊びに来ました。孫二人は二歳の男の子です。最初は母親に抱かれたまま身動きせずにいきました。その場の雰囲気慣れしてくるともうジツとしていません。楽しくて仕方がないというような笑顔で家の中を動き回り、私の両親はその様子を見てにこやかに笑っていました。人生を共に歩んできた八十八歳の両親のひ孫を見る穏やかな笑顔、二歳のひ孫のとても無邪気な笑顔、その様子を見ているだけで、心がほんのりと暖まるひとときでした。

(武居)